

李劫人の辛辣

——軍閥を見るまなざし

中 裕 史

一 はじめに

中華民国期の四川省において、軍閥勢力は猖獗をきわめていた。軍閥は、それぞれが防区とよばれる根拠地をもち、その勢力範囲のなかで軍餉を調達し、兵士や軍夫を徴発した。そして自らの勢力範囲を拡張するために、あるいは拡張しようとしてくる相手を防ぐために、大規模な戦闘や小競り合いをたえず繰り返した。

こうした状況は文学の世界にも反映されている。民国期における四川作家の作品には、非常に高い頻度で軍閥が登場している。

李怡によれば、李劫人の小説で四川を題材とするもののうち、実力者が重要な登場人物であるものは七七％を占める。また、沙汀では七三％、周文では六九％を占める^①。李怡のいう実力者には地方行政機関の長や秘密結社の幹部なども含まれるが、これらと並んで大きな比重をもつのが軍人である。

そこで、小論では、李劫人の小説、とりわけ短篇小説に焦点をあてて、李劫人が軍人をどのような視座をとらえ、どのように塑像しているかを検討することにした。

経験ある作家は、往々にして自らが最も知悉する生活を選び、局部を分析することによって社会全体を表現して、その本質の何がしかを明らかにするものである。魯迅は幾多の人物を描いたが、その重点はつねに国民の悪しき民族性の問題におかれていた。李劫人が最もよく知っており、また最も憎んでいたのは軍閥社会であった。だから、自らの憎しみを大なり小なりの将校たちの描写に凝縮させるとともに、その非道を暴くことを通じて、不幸な人びとへの同情と、悪辣な社会に対する憎悪とを託したのであった。⁽²⁾

李劫人（一八九一―一九六二）は、成都に生まれ、勤工儉学でフランスに四年余り滞在した以外は生涯をほとんど成都ですごした。⁽³⁾ 代表的な作品は、清朝末期から民国初期にかけての四川動乱の時代を扱った長篇三作、すなわち『死水微瀾』、『暴風雨前』、『大波』である。このうちで、『大波』には軍閥が登場する場面がすくなくならずあるが、軍閥の特性ある断面を切り取って再現しているのは、やはり短篇小説においてであって、右に引用した張義奇の論文も、このことを論じているのである。

以下に、軍閥が重要な役割をになう短篇小説を、実力者を中心に描く作品と下級兵士を中心とする作品に分けて、それぞれどのような視座によって叙述がなされているのか検討する。その上で、李劫人の叙述の背景となる歴史的、社会的状況について考察し、さらには李劫人の叙述の特徴について分析を試みたい。

二 実力者を描く小説

李劫人がその軍隊小説に登場させる実力者は、民国期の成都あるいは成都近郊の県に駐留していた軍閥の一部隊の長である。階級でいえば、旅団長や連隊長クラスであり、軍閥の総司令のような最高レベルの指揮官とはちがって、成都市民などの庶民が直接にあるいは間接に関わりをもつことのできる範囲の指揮官である。

実力者を描く小説のなかで最もはやく書かれたのは『強盜真詮』⁽⁴⁾である。魯迅の『狂人日記』と同じ年に発表された、一万五千字余りの口語体小説である。題名から窺い知られるように、李劫人は、まことの強盜とはどのような者をいうのかを、ある県に駐留する部隊の司令およびこれに代わって県城を占拠する部隊の連隊長の形象を通じて、痛烈に描き出している。

物語は、市の立つ、わりあい大きな村に派遣されてきた一隊の兵士が二名の強盜を捉えたところからはじまる。この部隊の将校は、村の自衛組織の長である団総に対して報酬を要求し、団総が出す余裕がないと言うと、兵士たちが村のなかで発砲して村人を脅しつける。せんかたなく、団総は村人から金や装飾品を寄せ集めるが、要求された金額にははるかに及ばなかった。けれども酒食でもてなしをして、ようやくのことで本隊が駐留する県城に戻ってもらう。

県城では、司令が自ら強盜の取り調べにあたる。この二人はもと良民であったが、続けさまに二十度あまりも強盜の被害にあって、家財のみならず子どもまで連れさられてしまい、自らは空腹のあまりに備えのない貧しい家におし入って盗みをはたらいたことがわかる。しかし、司令は見せしめのために二人を銃殺にし、街じゅうに告示を出して功績を誇示する。

ちょうどその頃、かねてからこの司令の独断専行や税金横領を憤っていた上官が、司令の押さえ込みを図っ

て、一人の連隊長に二個大隊を率いさせ、県城に向けて進発させていた。これを知った司令は敵わぬとみて、役所や商家に押し込んで金品を強奪した上で立ち退き、部隊の温存を図る。

司令に代わって県城に蟠踞することになった連隊長は、県の紳士や商人を集めて、銃剣をもった兵士に彼らを取り囲ませ、軍隊の経費を用立てるようにと迫る。思うように金が集まらないとみるや、兵士を各戸に分派して力づくで取り立てをおこなった。

以上は物語の前半部分のあらましであるが、このようにストーリーをたどってみるだけでも、本物の強盗とは誰のことなのかがすでに明らかになっていよう。

では、李劫人はこうした本物の強盗の形象をどのように描き出しているだろうか。以下に、後半部分の叙述に基づいて具体的に検討してみることにする。

「これら三つの理由があるゆえ、「撫」の一字が本当に益あって害なしだと、わしにはわかっているのだ。ただ、ここに一つすこし難しだろうと思われることがあって、……」

連隊長はここまでいうと、両の眼を見開いて知事を見つめた。知事には何のことかのみこめず、ぼんやりと連隊長を見ていた。

しまいに、連隊長はまた口を開いた。「その難しいことというのは、けっこうな額の金が入用だということだ。鶏を盗むのに一つまみの米が欠かせないのと同じなのだ。いま司令を招撫するのに、口先で説得できるわけではない。数日前に人をやって何度か説得させていて、すべての条件で折り合いがついているのだが、ただ一つ招撫の費用のことですこずっているのだ。二三日前から君に来てもらって相談しようと思っていたら、うまい具合に今日来てくれた。わしは金の調達を君に任せよう！……」

知事はこれを知ると、けっしていい任務ではないとわかったので、あわてて立ち上がり、お辞儀をしていた。「わたくしは才力薄弱にして、實際この任に堪えません。軍機を妨げるようなことがあってはなりませんので、ここはやはり他の方にお命じくください。」

連隊長はにわかに顔色を変えて言った。「辞退は許さぬ。このことはもともと君の土地の公事であり、司令が帰順したら、君の土地もしばらくは静かに治まるわけだ。まして金額も大きくないし、君はもともと有能だとの評判がある。三日で金を揃えろ！ 怠けてしくじったら、印判を引き渡して辞職してもらうばかりだ！」^⑤

右は、作品の後半部の一段で、いったん県城から退去した司令の部隊が勢いを盛り返して、県城の近くまで進出して民衆から金品の取り立てをおこなうまでになり、周辺の治安も悪化したのであるが、これは放置できないと考えた知事が、連隊長のもとへ討伐するよう要請しに出かけた場面である。

知事の要請に対して、連隊長は、司令を帰順させればその他の匪賊も自ずと消滅すること、司令の軍と戦えば土地が荒れるし、確実に勝てる見込みもないこと、省や国が大乱のさなかにある時には無駄に兵力を消耗せず、精兵を養って将来に備えるべきこと、の三点を滔々と述べたて、知事を煙に巻き、逆に司令を帰順させるのに必要な費用を調達するよう命じるのであった。

知事が難色を示すと、連隊長は、司令を帰順させることは知事にも有利であり、またさほど難しいことではないと言いながらも、おしまいには三日と期限を切って強引に引き受けさせている。

作品冒頭に登場する二人の強盗は、生きるためにわずかな食いぶちを貧しい人びとからかすめ取っただけである。これに対して、司令は退去時に武力にものをいわせて住民から金品を強奪したし、連隊長は県城に入っ

た直後に経費を借用したばかりでなく、さらに招撫の費用と称して、紳士や商人といった分限者たちを脅して金を搾り取った。

李劫人は、これら二つの類型を対比させることによって、強盗として捕縛された者と民草のために奸を除いたとして功を銜う実力者と、実のところそのいずれが民衆にとって害の甚だしいものであるのかを示しているのである。

さらにいえば、二人の強盗はもとは良民であったものが強盗にすべて奪い尽くされた揚句に自分たちも強盗に身を落とさざるを得なくなったのであるから、良民を強盗に淪落させるのは、やはり強盗、それも後者のような実力をそなえた強盗であると、李劫人は示唆しているのである。このことにもきちんと目を向けておく必要がある。

李劫人は、この後に、招撫の費用を集めきれなかった知事に代わり、連隊長によって新たに知事の地位に就けられた老人が、こちらにも前任者と交代したばかりの徴収局長とはかって、紳士の一人を縛り上げ、つるしあげてみせしめとする場面を置いて、直接的に暴力に訴えて費用を集める連隊長の非道ぶりを描いている。

そして作品の末尾では、連隊長がそうして集めた金の半分以上を自らの懐に入れ、残りを司令に届けたところ、司令は金を受け取り、人夫の徴発や金品の強奪をやめると約束をしておきながら、兵を按えて動かず、連隊長からの詰問に対しては、弾丸を支給してくれば匪賊の討伐に協力するとばかり回答する。

結局、連隊長と司令がにらみ合いの様相を呈し、県城内外の住民の災厄はまだまだ続いていくのである。

『強盗真詮』において、李劫人は、自らの利益をのみ図って民衆を搾取する実力者の形象を描いているが、この他に、自らの権力を恃んで人を人とも思わぬ態度で民衆を見下し、踏みつけにする側面により重点をおいた作品も書いている。

一九二六年に書かれた『請願』⁶は、師団本部にそれぞれ請願に訪れた二つの集団に対して、師団長がどのような応対をしたのかを描いた、四千字ほどの短い作品である。

一方の集団は、学生や若い労働者たち三百人あまりが、「全民大会」および「請願救国」と大書した二枚の粗末な旗をおしたてて行進し、もう一方の集団は、年配の紳士たち三十人ほどが、旗竿が漆塗りで房飾りもついた上等な徳政旗をかがけて行進してきた。

まず学生と労働者の集団が紳士の集団を押しのけて師団本部まで進んできたが、これに対して、師団長は、本部の前に武装兵を配置して圧力をかけるとともに、副官を出して適当にあしらって解散させる。

つぎに紳士の集団が進んでくると、今度は正門を開いて中に入らせ、大広間に案内して茶菓を供してもなし、先の副官に加えて参謀や秘書官たちに相手をさせ、彼らの面目をほどこしておいて帰らせる。

しかし、師団長は本当はいずれの集団に対しても自分が出ていくつもりであった。むろん直接に請願書を受け取ったり、慰労をしたりするためではなく、騒ぎをおこしたがる若者たちに対しては厳しく叱責し、紳士たちにはすでに割り当てである上納金を催促して、ぐずぐず言うようであれば拘禁してでも要求をのませるつもりであったのだ。出て行かなかったのは、その時まさに夫人たちと「方城之遊」すなわち麻雀を楽しんでいて、夫人たちが彼の抜けるのを許してくれなかったからなのであった。

武装兵がものものしく警備する師団本部のなかにいて、公務に忙しく請願団体に応接する暇もないはずの師団長が、実のところ金と権力にまかせて手に入れた若い夫人たちと麻雀を打っており、団体の請願に直接対応できなかった原因はそのようなつまらぬことにあるのだと、李劫人は、師団長のだらしなさ、無責任を厳しく批判している。また、若者たちを叱りつけ、老人たちを脅しつけようとする態度からは、師団長の尊大さや傲慢さを読み取ることができる。このように、軍閥の実力者に対する李劫人の筆鋒は非常に鋭く、辛辣なもので

あるのだ。

李劫人のこうした辛辣さは時間が経過しても弱まることはなかった。『請願』から十年後に脱稿した『胡團長本領真大（胡連隊長は本当にやり手だ）』では、胡という姓の連隊長が、一般市民の夫人を手箆めにしたうえで売り飛ばす非道ぶりを描いている。

「はっはっは！ 何のかのといってもやっぱり女だ。気の弱いことだな。人を殺しても瞬き一つしないわしらのような英雄が、何の報いなど恐れるものか。報いなら、わしのは多すぎて、この一件にはまわって来ん。もしこの一件にだけまわって来るなら、わしには息子も娘もないから、おまえたちがわりをくうだけで、わしには関係ないだろうよ。……」

胡連隊長は本当にやり手だ！ 彼は口に出したことはきつとやり遂げる。この一件も思い通りにやり遂げた。⁽⁸⁾

右は、やりくちがひどすぎて報いがあるのではと第四夫人が言ったのに対して、胡連隊長が答えた場面である。彼は、映画館で、ある一般女性にちょっとしたいを出したが相手にされなかった。以来このことを根に持っていたのであるが、ある夜、娼館に行こうとして家をまちがえ、たまたま入って行った一般市民の家でその女性を見て、仕返しをすることを決めた。そしてそれを実行したのであった。

李劫人はこの連隊長をならず者のように描いている。人を人とも思わず、自分のやりたいことをやりたいようにし遂げる。『胡團長本領真大』という作品のタイトルは、一見したところ誹謗の意味を含んでいないようであるが、作品を読み進めていくと、読者は、タイトルの「本領真大」に辛辣な諷刺のニュアンスがこめられ

ていることに気がつくであろう。

三 下級兵士を描く小説

これまで軍隊における実力者を主要な登場人物とする作品を見てきたが、李劫人にはこれとは別に、下級兵士を主人公にした作品もまたある。こうした作品において、下級兵士は先の作品における実力者と同じように、良民にとって災難を引き起こす厄介者として塑像されているのであるが、実力者に対する時の辛辣さは幾分か抑えられている。以下に、こうした点について分析を試みたい。

下級兵士を主人公にした作品としては、一九二五年の『失運以後的兵(運に見放された兵士)』と翌二六年の『兵大伯陳振武的月譜(兵隊さん陳振武の月譜)』の二篇^⑨を挙げることができる。前者は、敗走した二人の兵士を主人公とし、逃れた先の田舎町で団防に捕えられそうになったところを、辛うじて町の外に脱け出すというストーリーである。一方、後者は、安い手間賃で短い距離を行く臨時のかごかきから兵士になった主人公が、戦闘に加わって敗残兵となるまでの十カ月を月ごとに分けて叙述した作品である。

まず、『失運以後的兵』から検討してみよう。

この作品は六千字ほどの短篇で、叙述の中心は戦闘およびその前後におかれている。つまり、どうして戦闘がおこり、二人の部隊がどのように戦い、敗れた後にどのような状況に陥ったかということに大きく紙幅をさいていて、主人公である張占春と李得勝の二人に関しては、冒頭部分において、新都県の小作人であった彼らが軍隊に拉致されて、重慶に属するある県城に駐留する師団の一部隊の兵士になった経緯を、語り手の語りによって叙述するが、これを除けば、二人の外面あるいは内面についての描写が少ない。その結果として、読者

は、二人の人物形象よりも、むしろ、戦闘を引き起こして兵士を無残な目にあわせた師団長の貪欲の方に強い印象をもつことになるのである。

師団長は年若く、出世もきわめて速く、日頃は上司から書面でお叱りをうける以外に、他人から盾を突かれたことなどなかったのです、すぐさま拒絶し、机をたたいて叫んだ。

「ほごくな！ 要するに、金だ！」団総は気骨ある紳士で、これまでもお上を恐れなかったが、こちらも腹を立て、胸を張って言った。「金が欲しいなら、やはり道理を述べなくては……」。バシッとその左ほおを師団長のびんたが見舞った。続けて罵声がとんだ。

「クソッたれが！ 道理だと！ 民国の時代に道理など通るものか。……」¹⁰。

右は、正式な税や上納金に加えて、臨時に軍費を徴収すると言い出したのに対して、西郊の住民がこれを苛税だとして、団総を県城に寄こして免除を願った場面である。

若い師団長は、団総の面子をたてることなど考えもせずに、口汚く罵ったうえに、横面をはりとばすなど、身勝手で横暴な人物として、またその軽率な言動の結果として、西郊を含む四方からの包囲攻撃を招いた無思慮な人物として描かれている。この作品における李劫人の視線も、さきに見た実力者を描く作品と一貫していることが見てとれるだろう。

つぎに、『兵大伯陳振武的月譜』について見てみよう。

この作品は、最初に「序章」を、最後に「尾声」をおき、その間に、臨時雇いのかごき陳老三が兵士になり、陳振武と名前をつけられて、しだいに兵士らしい兵士になっていく十カ月を、一カ月ごとに区切って叙述

する体裁をとっている。字数はおよそ三万字を数え、短編としては長い部類に属する作品である。

人力車が人にぶつかっても、全く車夫の過失であるということにはならない。陳振武にはこのことがよくわかっている。以前、臨時のかごかきをしていた時にぎやかな市場で、かじ棒の先を人にぶつけたことが何度もあった。耳のついてないやつはぶつけられてもしかたないと彼は言ったものだ。「のどがつぶれそうになるくらいずっとわめいてるんだ。なのに道のまんなかにぼーっと突っ立ってやがる」。それで、彼は、道にころがされた時に昔のことを思い出して、自分がわるいと思った。だが、性分のなせるわざで「こんなくしょう！」と口に出していた。思わぬことに、その車夫は彼に突き当たって二三歩行ったところで、前から来た二人の兵隊につかまってしまった。一人が一発ずつお見舞いし、罵倒した。「逃げるのか！ 人を突き倒しておいて、お前は逃げるのか！」人力車に乗っていたのは、きちんとした身だしなみに大きな眼鏡をかけた知識人だったが、こちらもあわてて、「このめくらめ！ 早くあやまれ！ 早くあやまれ！」と言った。^{①②}

右は、兵士になってまだひと月に満たない陳振武が成都の賑わいぶりを見物しに繰り出したところ、一緒に出かけた古参兵たちにはぐれてしまい、一人で歩きながら街の大きさに圧倒されてぼんやりしていたところへ、人力車がぶつかってきて道にころがされた場面である。

人込みを縫うようにして走り抜ける人力車にぶつけられても、一般的にはよけなかった方が悪いということになるのだが、相手が軍服を着た兵士の場合にはそうはいかない。理由がどうであれ、状況がどうであれ、ともかく兵士の方に分があるのだ。

ただ、陳振武は軍服こそ支給されたものの、気持ちの上ではまだ兵士になりきっておらず、一言悪態をついただけで、こうした場合に兵士が当たり前のようにすることに全く考えが及ばない。そこへ通りかかった別の部隊の兵隊二人が何をすべきなのかを教えてくれたのである。

軍服は虎の皮であって、人が見れば恐れをなすものだということを、陳振武は前から知っていたけれど、そのうちにはこのようにあまたの奥義があり、「金も上げができる」神通力をもった宝物であることを、今日のはじめて理解したのであった。それならこいつは本当に大事なもので、もし汚しでもしたら、まったく人間じゃない¹²。

軍服さえ着ていれば、こちらに少々の非があっても、車夫や客を脅かして金をとることができる。このことに気づいて、陳振武ははじめて本当の意味で兵士になったのである。李劫人は良民が兵士に変わっていく契機を、このように巧みに設定し、叙述している。この出来事ののち、陳振武は古参兵と一緒に、女性をからかったり、賭博をしたり、良民から金銭を巻き上げたりするようになるのである。

この半年後、彼の部隊は敵側に寝返ろうとして失敗し、本隊の攻撃をうけて壊滅してしまう。陳振武は命こそ助かったが、武器も軍服も失い、ためこんだ小金まで奪われて身一つに逆戻りしてしまうところで、物語は閉じられる。

しかし、先に述べたように、李劫人はさらに「尾声」において、陳振武のその後の身の振り方を読者に提示している。この「尾声」の語りはたいへん示唆的である。

しかし、わたしには読者に知らせておかねばならないことがある。陳振武が次の日に作者と別れるとき、作者がこれからどうするつもりかと尋ねたら、彼は気取りなく正直に、すぐさま答えた。「やっぱり兵隊だろうな！」¹³

もうすこしで命を失ってしまう瀬戸際まで追い込まれながら、主人公は、まるで懲りないかのように、また兵隊になるだろうという。主人公のこの考え方に対して、一度でも天国の心地よさを知った者は、たとえ地獄を見ようともかつて味わった心地よさを追い求め続けるものだと解釈するのは適切ではあるまい。陳老三が陳振武になったのは、飢饉で米の価格が上がって家族を養うことが難しくなったところに、軍閥が兵士たちに好き放題に米を徴発することを許したために、米が姿を消してしまいまったく手に入れることができなくなったせいである。陳老三はまさに自分が生きるため、食うために家族を捨てて村を逃げ出したのである。

食うために兵士になり、数か月の間とはいえ、腹いっぱい食う日々を過ごした主人公にとって、兵士でなくなることは食えなくなることを意味している。言いかえれば、陳振武にとって、兵士になることはすなわち食うことなのである。逆説的な言い方かもしれないが、彼は命を危険にさらすことを承知のうえで、生きるために食うことを選んだのである。

ところで、主人公にこのような選択をさせたのは誰であろうか。他でもない、軍閥である。この作品において、李劫人のまなざしは、一見、下級兵士である主人公に注がれているようであるが、その実、主人公の背後にある、強大な力を擁する存在にまで及んでいるのである。つまり、下級兵士を主人公にした作品においても、李劫人は間接的な形で軍閥を指弾し、批判しているということができるのだ。

四 民国期の成都をとりまく状況

中国はその長い歴史のなかで分裂と統一を繰り返してきたが、なかでも成都を中心とする蜀の地方は、戦乱が頻発したことをもって知られる。「天下未だ乱れざるに蜀先ず乱る」というよく用いられる言葉が、そのことを端的に表わしている。

李劫人が作家として健筆をふるった民国期にあっても、成都はやはりそのような状況下にあった。李劫人が軍閥の醜態を小説の形式に仕立てて批判した背景はいかなるものであったのか、以下に述べておきたい。

中華民国が成立すると、成都には四川都督府がおかれた。初代都督となった尹昌衡は、旧清朝の新軍や保路同志軍などをもとに、新たに五個師団を編成して四川陸軍を整備した。しかし、第二次革命では、第五師団の熊克武が孫文の側に立って他の四個師団と戦火をまじえ、さらに、雲南や貴州、陝西などの軍が袁世凱の命をうけて四川に侵入して、戦局は複雑なものとなった。袁世凱は一応の勝利を得て、成都に腹心陳宦を送りこみ、四川陸軍を統括させたが、護国戦争がおこると、雲南軍閥の蔡鍔が四川に侵入し、四川陸軍と結んで、北洋軍を駆逐した。

袁世凱の死後、四川督軍に任じられたのは蔡鍔であった。蔡鍔は病のためにまもなく成都を離れたが、北京政府は雲南軍閥の羅佩金をその後継に任じ、貴州軍閥の戴戡を四川省長に任じた。ここから、四川に居座った雲南・貴州軍と四川軍と対立・抗争が激化していくのである。

一九一七年には、成都の守備をあずかる四川軍の劉存厚が、四月に羅佩金の雲南軍と、七月には戴戡の貴州軍とそれぞれ激しい市街戦を繰りひろげた。この結果、四川軍は雲南軍および貴州軍を成都から駆逐すること(14)に成功したが、成都の市民は多数が死傷し、家も焼かれて被害は甚大であった。

二度の市街戦に勝利をおさめた劉存厚は、北京政府によって四川督軍に任じられたが、孫文が広東で段祺瑞の打倒を呼びかけると、四川では熊克武らが呼応して挙兵し、成都を目指して攻めよせた。劉存厚はこれを支えきれずに成都を放棄して川北から陝西南部に退いた。

李劫人が『強盜真詮』を書いたのは、このように四川軍・雲南軍・貴州軍が入り乱れて対峙し、成都が市街戦の戦場となって混乱のさなかにあった時期なのである。このとき、李劫人は『四川群報』の主筆を務めていたが、『四川群報』が閉鎖されると、すぐに『川報』を自ら創刊して編集にもあたった。¹⁵『川報』の一九一九年一月一日新年増刊号には、彼がその前年一九一八年における軍閥の動きを記録した大事記が掲載されている。¹⁶

この記事は、一八年一月一日の「もと第二師団長、崇威將軍劉存厚、成都にて四川督軍の職に就く」からはじまって、年末までの出来事を記したものである。これによると、劉存厚は一八年二月一九日に成都を離れ、川北に向けて撤退した。同月二十一日に重慶を発した熊克武は翌三月十日に成都に入った。三月十四日に北上して昭化に至った劉存厚は、ここでも持ちこたえることができずに、六月九日に陝西に退いている。

李劫人はこのように軍閥の動向をたえず注視していた。もちろん、彼個人の身近に戦鬨の影響が及んでいたこともあるが、それ以上に、ジャーナリストとして、市民の生活を脅かす軍閥に対して憤りを感じ、その動静を報道する責任を果たそうとしていたと考えるのが適切であろう。そうして、市民の平穏な日常生活に闖入してくる軍閥の身近さという異常な現実と、その非道を指弾する責任感とが、李劫人の小説の背景となっているのである。

さて、軍閥の脅威はきわめて甚だしく、成都において、市民の生命や財産に重大な被害をもたらしたのは、先述した二度の市街戦にとどまらない。

熊克武が、靖国各軍総司令として一九一八年に発布した「四川靖国各軍衛戍及清鄉剿匪区域表」、および翌

一九年に発布した「四川靖国各軍駐防区域表」^⑰によって、四川省の各地に「防区」と称する根拠地を得て収奪を恣にしていた軍閥は、互いに抗争を繰り返していたが、一九二六年に蒋介石が国民革命軍総司令に就任すると、「川軍易幟」といわれるように、相次いで国民政府に帰属し、それぞれの「防区」に拠りながら国民革命軍の旗印を掲げたのであった。

それらのうち、成都に駐留していた二十四軍の劉文輝と二十九軍の田頌堯の両軍が、一九三二年十一月に衝突して、成都で三度目となる大規模な市街戦を展開したのである。この市街戦について、李劫人は「危城追憶」という散文を三六年に書いて、街の戦闘当時の様子を事細かに記録している。

それによれば、旧皇城、その当時の四川大学の校地に隣接して高さ五丈ほどの小さな山があった。山といっても石炭がらが積み上げられて高くなっただけのものであるが、街じゅうが平坦である成都にあって、城壁や鐘鼓楼より高い場所はここよりなく、おおぜいの市民がこの山に登って眺望を楽しんだそうである。^⑱

さて、相手の動向を見渡すことができ、大砲を据えるにも都合なこの石炭がらの山をめぐる、両軍が激しい争奪戦を繰りひろげたために、付近の街は無残に破壊されてしまった。そこで市民たちは二度とこのような市街戦がおきないようにするために頭をひねり、ついに現実的にしかつ个性的な方法を考え出した。

それはつまり救済義捐会が数千人の労働者を雇い、ただちにあの憎むべき石炭がらの山を平らに削って、泥まみれになっている石炭がらをよそへ運んで低地を埋めるという方法である。「こいつを平らにしてしまおう、この次もここで命のやり取りができるかどうかだ。」これは烏が鳴かないようにするために木を切ってしまうおうという哲学なのである。^⑲

市民たちは二度と市街戦の憂き目に遭わないようにするために、あれこれ方法を考えた。軍閥には今後、びた一文出さないとか、両親や妻女に呼びかけて軍隊にいる息子や夫を呼び戻させるとか、兵工廠を閉鎖して製造機械を破壊するとか、いろいろな意見が出されたが、いずれも実行不能なものばかりであった。そこへ出てきたのが右に引用した考えである。これにはみな手が打って感嘆し、すぐさま実行に移したら、その後、市街戦は発生しなくなったという。

この文章から、軍閥に対する成都の市民の態度を読み取ることができる。戦闘によって自分たちの街を破壊されるのは願い下げだが、その一方で、なるべくなら軍閥と関わりをもったり、軍閥を刺激したりするようなことは避けたい。カラスの鳴き声はうるさいが、かといってカラスを殺したり、追い払ったりするような直接的な手段は用いずに、止まって鳴く場所をなくしてしまえばいい、という哲学である。『論語』にみえる「敬してこれを遠ざく」の哲学といってもいいかもしれない。

民国期の成都市民にとって、軍閥は恐ろしく、忌むべき存在であった。ただ、あまりに身近にあったために、直接対立することは避けながら、その害を免れようと知恵を働かせていたのである。

五 李劼人のまなざし

李劼人は、これまで見てきた二つの類型の短篇小説において、いずれも軍閥の実力者を視線の先にとらえている。そのとらえ方、態度は非常に厳しく、辛辣である。

紳士たちに軍餉を要求し、言うことを聞かぬとみると暴力に訴える。金銭と権力にものをいわせて何人も夫人を囲い、麻雀を打ったりアヘンを吸ったりして、市民の代表が訪れても取り合わない。市民に向かえば居

丈高に脅しつける。社会秩序の悪化を放置し、あるいはその手で悪化させて、良民が強盗や兵士に身を落とさざるをえない状況を作り出す。李劫人は語り手による語りや登場人物の言動の叙述によって、軍閥の実力者のこうした振る舞いを厳しく批判している。

しかし、読者は、そこからとげとげしい批判のみを読み取るわけではない。李劫人の語りにはユーモラスな味わいがあり、それが、作品を単なる暴露ものとどまらせず、読者の関心をひきつけて、語りに耳を傾けさせる大きな機能を担っているのである。

会が散じて、各人は出てくると、みな同じように顔をしかめ涙をこぼして、何度かため息をついた。それでも道を歩きながら恨み言は一言も口に出さなかった。たちの悪い者に聞かれたら無益なばかりでなく、さらに罪を負わされることになるのを恐れたからである。それでうつむいて一步一步と家路をたどりながら、ご先祖の位牌に向かって痛哭した。――第一に、ご先祖はどうして子孫をお生みになったのか！ またどうして子孫にこのような財産をお残しになったのか！ 第二に、自分はどうして庶民であるのか！ しかもどうして金持ちの庶民であるのか！⁽²⁰⁾

右は、『強盗真詮』の一節で、県城に拠っていた司令が退去の際に役所や裕福な商家などから金品を強奪して行った後、県城に入った連隊長もまた紳士たちに五万元の軍費を用立てるよう命じた後の場面である。入れ替わり立ち替わる支配者によって、つぎつぎに金をとりたてられる紳士が、その内心の苦衷を祖先に向けて訴える。

裕福な紳士が金を搾り取られるのは、普通の庶民にとっては同情すべきことというよりむしろ快哉をさげぶ

ような出来事であろう。それだけでもある意味で愉快なことであるが、持って行くところのない苦衷を、他でもない先祖に訴える紳士の姿に対しては、その滑稽さにひとときの優越感すら覚える読者もあるかもしれない。また、庶民であることへの愚痴に対して、読者は、なるほど、彼が軍人や役人であったならこのような目には遭わずに済んだものをと、共感を覚えることであろう。

このように、李劫人は、普段とりすましている紳士の哀れな姿について語り、その落差を示すことによって、そこから生じる優越感や共感に基づく可笑しみを語りに盛り込んで、読者をひきつけているのである。つぎに、語り手による語りでなく、登場人物のユーモラスな対話を利用した叙述をみてみよう。

彼は兵士に変わっただけでなく、名前も変えた。それは募兵委員が筆をとって彼の名を書こうとした際にこう言ったからだ。『陳老三という名は田舎くさくて、軍人の名前らしくない。おまえ、他に名はないか。』『狗児という小さい頃の名があるだけです。』『それじゃよい話にならない。待てよ、ひとつ名前をつけてやろう。……そうだ、前に戦友がいて、やはり陳という姓だった。戦死したんだが、名は陳振武といった。強そうで格好いい名じゃないか。いま書いてやろう、陳振武だ。……威武の武だ。ちゃんと覚えておけ！今夜の点検で陳振武と呼ばれたら、おまえのことだからな。』²¹

右は、『兵大伯陳振武的月譜』の一節で、成都に出てきた陳老三が兵士になり、新しい名をつけてもらう場面である。いかにも田舎者という感じの陳老三という名を聞いて、他に名はないのかという募兵委員に対して、いっそう田舎くさい子どもの頃の名を持ち出す主人公の物言いは、あたかも相声を聞いているかのよう可笑しい。また、その主人公に戦死した戦友の名をつけてやる縁起の悪さは、さらに滑稽さを増しているし、いか

にも猛者らしい感じを与える新しい名と実際の主人公の形象との落差も、読者にユーモアを感じさせる要素として機能している。

李劫人は、このように語り手の語りと人物の対話をともに利用して、その面白さ、ユーモラスな味わいによって読者を作品のなかに引きこんでいる。その割合でいえば、前者の語りの方がより多く用いられている。李劫人は、作品のなかで饒舌な語りを展開し、そこに適度なユーモアを盛り込むことで、読者を飽きさせず、語りに耳を傾けさせている。これは李劫人の叙述の重要な特徴であるといえる。

六 おわりに

これまで、軍隊に材を取った李劫人の短篇小説について、実力者を中心におく作品と下級兵士を主人公にすえた作品とに分け、直接的であるか間接的であるかの違いはあるにせよ、そのいずれもが成都市あるいはその近郊に駐留する軍閥の非道を、さまざまな角度から辛辣な筆致によって描いており、作者が軍閥に対して批判的な態度を一貫して持ち続けていたことを論じてきた。

そして、その辛辣さは、軍閥が駐留する街に長く住み、身をもって軍閥の横暴を経験した作者の生活体験に根ざしたものであり、鋭い筆鋒は、たえず軍閥の動向を注視し、その圧力をうけながらもジャーナリストとして活動した経歴から生まれたものである。

しかしながら、李劫人の叙述は暴露一色にとどまっているわけではない。語りの随所に笑いを散りばめて、読者を飽きさせることがない。こうした特色ある語りを可能ならしめた要素は何であろうか。

李劫人は、表向きは新文化を鼓吹しながらたくさんの女性を夫人として囲っている軍閥の実力者を主人公と

する、短篇小説『大防』の冒頭で、つぎのように語っている。

わたしは郷土の榮譽を発揚するために、ある出来事についてすこし話すこととし（ひとつ「龍門陣」をしなくこととするというべきだ）、一碗の麻婆豆腐の代わりとしよう、よろしいかな。⁽²²⁾

四川では、とりとめのない話をすることを「龍門陣をしく」（「擺龍門陣」）という。李劫人は小説の叙述を進めていくことを、目の前にいる聞き手に対してあれこれと語るその語りになぞらえているのである。すると、叙述の特色をなす要素の一つである滑稽な語りも、「龍門陣」を構成する欠かすことのできない一部分であるものが、小説の叙述に組みこまれたと考えてよい。

李劫人は学生時代から語りの名手であった。郭沫若によれば、中学時代の李劫人は、友人たちにせがまれて彼が読んだ古今東西のさまざまな小説を語って聞かせていたそうである。⁽²³⁾ 李劫人の叙述は、自らが得意とした四川式の語りを小説の語りに持ち込むことによって、成立しているということができるのである。

注

- (1) 李怡『現代四川文學的巴蜀文化闡釋』（湖南教育出版社、一九九五年、五七～五八頁）。
- (2) 張義奇『李劫人の短篇小説における美學的追求のあらましを論ず』（原題『略論李劫人短篇小説的美學追求』、成都市文聯編研究室編『李劫人作品的思想與藝術』中國文聯出版公司、一九八九年、六一頁）。
- (3) 拙稿『李劫人の成都描寫』（『中國文學報』第四十一冊、京都大學文學部中國語學中國文學研究室、一九九〇年、

一一〇—一一二頁）を参照。

(4) 『李劫人全集』第六卷（四川出版集団・四川文芸出版社、二〇一一年）に収載する『強盜真詮』末尾の記載によれば、本作は一九一八年五月二七日から六月二二日にかけて『国民公報』に連載。なお、王緑萍『四川報官五十年集成』（四川大学出版社、二〇一一年、四一頁）によれば、『国民公報』は、一九二二年四月に汪象孫によって創刊され、軍閥権力による閉鎖などを乗り越えて一九三五年五月まで刊行された。

(5) “因爲有這三層，所以我就曉得，撫之一字，實在有益無害，現在只一件事體稍覺困難……”

團長說到這裡，便睜着兩眼把知事看着。知事莫明其妙，也呆呆的看着團長。

末了，團長又才說……這困難的事，就是要花一筆大錢，猶之偷鷄賊，斷乎離不了一把米的。現在若要招撫司令，并非空口白舌說得下的。所以在前幾天，我已遣人去說了幾次，甚麼條件皆磋商妥當，惟有招撫費一層，却很棘手。昨前兩日，我就打算招呼你來商量的，恰好今天你既過來，我就把這籌款一事，交把你去辦罷！……”

知事一聽，知道這并不是甚麼好差事，慌忙站起來，鞠躬回說……知事才力薄弱，實在不勝此任，恐防有誤軍機，求團長還是另委能員！……

團長登時作色說道……你別推諉！這本是你地方上的公事，若司令就撫以後，你地方也可清靜一時，何況錢也不多，你又素有能名，限你三天籌齊！儼若疲頑誤事，你把印信交過來，只管請罷！……

原文は上掲『李劫人全集』第六卷一八〇頁より引用。

(6) 『李劫人全集』第六卷に収載する『請願』末尾の記載によれば、本作は一九二六年上海『北新』雜誌第二卷第四号に掲載。

(7) 『李劫人全集』第六卷に収載する『胡團長本領真大』末尾の記載によれば、本作は脱稿の翌年一九三七年に『國論』第二卷第六期に掲載。なお、王緑萍『四川報官五十年集成』（上掲、四一八頁）によれば、『國論』は中国青年党の機関誌として一九三五年七月に上海で月刊の形で創刊された。三八年二月からは成都で週刊として刊行されている。

(8) “哈哈！到底是婆娘家，心慈面軟的。我們殺人不眨眼的英雄，怕啥子報應，要說報應，我帶的過也多了，報應不到這一樁。要說專報應這一樁，我没兒没女的人，也只有你們幾個喫虧，還不是和我没相干的。……”

胡團長本領真大！他說得出，做得出，這件事果然就如其所欲的做了。

原文は『李劫人全集』第六卷三八九頁より引用。

(9) 『李劫人全集』第六卷に収載する作品末尾の記載によれば、『失運以後の兵』は一九二五年三月から四月にかけて上海『醒獅』週報第三一～三三三号に連載。また、『兵大伯陳大伯の月譜』は一九二七年八月上海『東方雜誌』第二四卷第一五号に掲載。

(10) 師長很年輕，出頭極快，平時除了受過上司的紙面申訴外，從未被人頂撞過半句，所以登時就不答應了，拍着桌子叫道……放屁！……總之，我要錢！……團總是個硬錚紳士，多年就不怕官的，也生了氣，挺起胸膛說道……要錢也得講道理……“啪的一下，他那左邊臉上早被師長賞了一個結實耳光，接着罵道……狗娘養的！講理！民國時候是講理的？……”

原文は『李劫人全集』第六卷二三〇～二三一頁より引用。

(11) 東洋車把人撞倒，這未必完全就算是車夫的罪過，此情獨有陳振武知之甚深。他以前擡加班時，也曾在熱鬧的鄉場上用轎竿頭撞倒過好些人；他說這些不帶耳朵的東西，是應該喫撞的……“覺你一路喊破了喉嚨，他還是呆呆立在街當中，”所以此刻躺下之後，便回想起從前，覺得是自己不對，可是天性中又不由不要罵一聲……“你媽的……”不料那車夫把他撞倒，才跑了兩步，早被當面兩個丘八抓住，一家一掌，口裏還在罵……“跑！把人撞跌了，你敢跑！”坐在車上的是一个穿長袍馬褂戴大眼鏡的斯文人，忙說……“瞎眼的東西，快賠禮，快賠禮……”

原文は『李劫人全集』第六卷三三四頁より引用。

(12) 軍裝是老虎皮，令人看見了就生畏，陳振武是知道的，然而今日之下，才明白這中間還有如許其多的玄妙，還是一件“生財有道”的法寶，那，這東西真可貴了，若洩污了它，簡單不算人了！……

原文は『李劫人全集』第六卷三三五頁より引用。

(13) 不過有一事我須告訴讀者，就是陳振武次日與作者作別時，作者問他以後打算做甚麼，他老實不客氣，一口就答應……“還不是去當兵！”

原文は『李劫人全集』第六卷三六二頁より引用。

(14) 何一民『成都通史』(四川出版集團・四川人民出版社、二〇一一年、一八頁〜一九頁)は、匡珊吉・楊光彦『四川軍閥史』(四川人民出版社、一九九一年)を引いて、四川軍と雲南軍による第一次市街戦では、市民の死傷者一万人以上、家屋の焼失三千戸余り、四川軍と貴州軍による第二次市街戦では、市民の死傷者六千人以上、家屋の焼失三千戸余りと記載している。

(15) 王緑萍『四川報官五十年集成』(上掲、二七頁)によれば、『四川群報』は樊孔周が一九一五年十月に自らが発行していた『四川公報』を名称変更し日刊として発行したが、一九一八年四月に熊克武によって閉鎖された。同じく王緑萍『四川報官五十年集成』(上掲、六九頁)によれば、『川報』は一九一八年七月に創刊された。李劫人が社長兼編集長を務め、少年中国学会の同人が外国から記事を寄せた。一九二四年に楊森によって閉鎖された。

(16) 『李劫人全集』第七卷に「四川一年来大事記」と題して収載。

(17) 吳光駿『四川軍閥防区制的形成』(四川省文史研究館編『民国四川軍閥実録』第二輯、四川出版集團四川人民出版社、二〇一一年、一二六頁)。

(18) 『李劫人全集』第七卷収載。

(19) 就是由捐賑會雇幾千工人，趕緊把那可惡煤山挖平，將已變爲泥土的煤渣，搬往別處去填低地。將這個東西鏟平，看你們下次還來拼命的爭不？」這是砍斷樹幹免得老鴉叫的哲學。

原文は『李劫人全集』第七卷一五八頁より引用。

(20) 散會之後，各人出來，一例的哀眉泪眼，嘆聲不絕，路途之間，又不敢出一句兩句怨言，恐怕惡客聽見不惟無益，反轉罪上加罪，只好低着頭一步一步挪回家去，對着祖宗靈牌痛哭一場——第一，恨祖宗爲甚麼要生子孫！又爲甚麼要給子孫遺留這些產業！第二，恨自家爲甚麼要當百姓！又爲甚麼還當有錢的百姓！

原文は『李劫人全集』第六卷一七七頁より引用。

(21) 他不但變成了兵，而且還更易了名字。這因爲招兵委員提筆寫他的名字時，說：「陳老三這個名字太土俗，不像一個軍人的稱呼，你還有別的名字不？」只有一個小名叫狗兒，「這更不成話了！等着，我替你改一個……也好，從前我有一個朋友，也姓陳，打死了，他的名字叫陳振武。這不是又威風又好聽的嗎？現在我就給寫上……陳振武……威武的武

字，記清楚！今夜點名叫陳振武，就是你了。”

原文は上掲『李劫人全集』第六卷三二八頁より引用。

(22) 我爲發揚鄉光起見，且談一件故事（我應該說擺一個“龍門陣”），權當一碗麻婆豆腐，好嗎？
原文は『李劫人全集』第六卷一八九頁より引用。

(23) 郭沫若『中國左拉之待望』（『李劫人選集』第一卷、四川人民出版社、一九八〇年、七頁）。

Bitter Irony in Li Jieren (李劫人) : Mostly on Short Stories about Military Cliques

Hiroshi NAKA

Abstract

Sichuan (四川) province was infested with military cliques in the first half of the twentieth century. Many Writers born in Sichuan described officers and soldiers in their literary works. Li Jieren attained fame for his three historical novels. But officers and soldiers appeared in his short stories more than novels. In short stories, Li Jieren sharply criticized despotism of officers and meaningfully described the lack of soldiers. He portrayed officers as despotic and acquisitive. On the other hand, he described soldiers who had ever been common people as indiscreet and unfortunate. Before writing stories, he had been a journalist and written many articles on the movements of military cliques. In Chengdu (成都) where Li Jieren born and lived in, conflicts between military cliques often broke out in the first half of the twentieth century. Therefore, military cliques were very familiar to him. But at the same time, they were dreadful and hateful to him too. However, Li Jieren, as a story teller, had a considerable talent with which he did not bore his readers. That is a humor came from daily life. He succeeded in drawing his readers into his narration through this unique talent. People in Sichuan province have the habit of chatting and telling some interesting stories to their friends or neighbors. They call it “Bai Longmenzhen (擺龍門陣)”. And Li Jieren applied this habit to his novels and improved their quality and succeeded in distinguishing his novels from simply disclosing works.